

シェイクスピアを読み解く

——ハムレットとプロスペローとにおける復讐と赦し——

日大生産工 ○福島 昇

1 まえがき

プロスペローは劇の後半で、弟と呼ぶことさえ口の汚れとなるようなアントーニオを赦す。アントーニオはプロスペローから大公の地位を奪い、娘ミランダと共に公国であるミラノから二人を追放した極悪人です。しかし、プロスペローは憎んでも憎みきれない極悪の罪もすべて赦してしまう。12年間も待った末、慈悲深い運命の神がプロスペローの恩を仇で返した者どもを、この島に引き寄せ復讐の絶好の機会がおとずれたのに、アントーニオもセバスチャンもアロンゾーもキャリバンとその一味もみんな赦し、魔法の杖も捨ててしまう。プロスペローはなぜ彼らを赦したのか。

置かれた状況は全く異なりますが、ハムレットはエルシノア城で父の亡霊に復讐を誓う。しかし、ハムレットの場合、プロスペローと異なり復讐の根拠となる証拠がない。亡霊は果たして亡き国王の善霊なのか。あるいは地獄の毒気をもたらす悪霊なのか。どちらかはっきりしない限りハムレットは復讐にふみきれない。クロードィアスが真犯人であり、亡霊の台詞が真実であったと確信できたのは、自ら仕組んだ旅芸人の芝居を見たときのクロードィアスの狼狽ぶりからです。そのときハムレットは復讐を改めて誓う。しかし、ハムレットは復讐のチャンスがあってもなかなか復讐を果たそうとしない。プロスペローと違って、父の仇を赦すわけにはいかないハムレットであるのに、いつまでも復讐を延ばしてしまう。ハムレットが復讐を果たすのは劇の最後のフェンシングの試合のときです。しかし、その復讐は言わば偶然によるものであり、いわゆる復讐とは異質のものです。なぜハムレットは復讐に迷いためらうのか。なぜ愛するオフィーリアを捨てたのか。なぜいわゆる

復讐とは異質なものになってしまったのか。

もっともプロスペローが復讐を遂げずにアントーニオらを赦しているのに対し、ハムレットは一応復讐を果たしている。シェイクスピアの劇で復讐をテーマにした劇は『テンペスト』と『ハムレット』を除いては他にはない。

本報告では、この二つの劇に共通のテーマである復讐に、二人の主人公がいかに対処しているかを比較、検討し、その違いと類似性を究明するのが目的です。

2 復讐と赦し

エルシノアの城に出没する亡霊の話をホレーシオに聞いたハムレットは早速その夜エルシノアに行く。亡霊は死の真相をハムレットに告げる。悪逆非道の人殺しの恨みを晴らしてくれという亡霊の訴えにハムレットは次のように答える。

ああ、早く聞かせてください、天が翔る想像力よりも、恋の思いよりも早い翼をつけて復讐へと飛んで行きます。

(1.5.29-31)

5幕の墓掘りの場面の老成したハムレットと較べると、ここには血に飢えた荒々しい口調で復讐を誓う若々しいハムレットがある。この台詞はハムレットと同じく父を殺されたレアティーズの復讐に満ちた台詞「だがいいか、父の恨みだけははらすぞ」(4.5.136-137)に通じる。

『テンペスト』は絶海の孤島に過ごしてきたプロスペローの魔法の嵐で始まる。プロスペローはこの嵐でアロンゾーやセバスチャンやアントーニオらを海の藻屑と化して復讐を果たそうとしているかのように見える。ミランダの台詞「かわいそうに、みんな溺れ死ん

Interpreting Shakespeare
-- Hamlet's Revenge and Prospero's Forgiveness --

Noboru FUKUSHIMA

で」(1.2.9)がそれを裏付けている。しかしプロスペローは積年の恨みを晴らすために嵐をおこしたわけではない。乗組員の安否をきづかうミランダに答えるプロスペローの「あの船の乗組員は誰一人、たとえ髪の毛一本たりとも失ってはおらぬ」(1.2.30-31)という台詞に見られるように、復讐心からではなく、彼らに反省を促し、ある理想的計画を実行するために嵐をおこしたのです。プロスペローはこのように最初から赦しの気持ちで彼らに接触して行くのですが、ハムレットはいつもクロードィアスに猛々しい復讐の念をつのらせている。

しかしハムレットはレアティーズのように性急には復讐に走らない。それは亡霊が善霊なのか、悪霊なのか、どちらかわからないからだけではない。ハムレットの復讐は父の恨みを晴らすという個人的な動機を越えて、崩壊した社会移序を再建する、腐敗したデンマーク国を匡正するという、まことに重い任務を負っているからです。ハムレットは次のような台詞を吐く。

いまの世の中は関節がはずれている、う
かぬ話だ、それを正すべくおれはこの世
に生を受けたのだ！ (1.5.189)

ハムレットの重い任務はもはや復讐という範疇を越えている。ハムレットにとってデンマークは牢獄であり、ハムレットの苦悩は牢獄に閉じこめられた囚人の呻吟です。その牢獄の中で悪夢にさいなまれながら、亡霊の命令を果たそうとするハムレットの復讐が、マキアヴェリ的なレアティーズの復讐とは全く異なるものであることは当然です。

プロスペローはエアリアルに命じてファーマディナンドを他の者とは別個に、安全に陸に漂着させる。プロスペローは激しい復讐心を抑え、理想的計画をたてて魔法を使ってそれを実行しようとしているのです。その計画はエアリアルの歌う美しい葬送歌にすでに象徴的に表われている。

その骨はいま白珊瑚、
かつての二つの目は真珠、
その身はどこも朽ちはてず、
海はすべてを変えるもの、

いまでは貴重な宝物。 (1.2.398-402)

この歌は父の溺死を嘆くファーマディナンドに聞かせる弔いの歌です。むくろは朽ち果てることなく、海の力によって骨は珊瑚となり目

は真珠となるのだ、という「海の変質作用」を歌う歌です。屍体が豊かな不思議なものに再生されるという台詞に喪失と回復のアレゴリーが暗示されている。このようにエアリアルの歌は5幕1場のプロスペローの赦しと和解の場面を予感させます。外れた関節を直すためにハムレットが復讐を誓うのとは対照的です。

ハムレットは復讐を誓ったとはいえ、ぐずぐずしてなかなか行動にでない。役者はたかが作り話にすぎない芝居に、かりそめの情熱に動かされ、その魂を絵空事の世界に打ち込んで烈しく慟哭している。それなのに自分は何んというぐずで愚鈍な怠け者だ、鳩のように気弱で、屈辱を苦々しいと思う勇氣さえ欠けている、と自分自身を責め、クロードィアスを「あの残忍好色の悪党め！」(2.2.580)と罵る。しかしプロスペローは娘ミランダに、アントーニオの陰謀によってミラノを追われた苦しいきさつを語るが、ハムレットのような烈しい復讐の台詞は使わない。エアリアルの「髪の毛一本なくしたものはいません」(1.2.217)という台詞に見られるように、恨み、つらみを抑え、敵に情けをかけている。勿論プロスペローにもハムレットに似た復讐心はある。自由の身にしてほしいというエアリアルを脅かすプロスペローの次の台詞に彼の復讐心が如実に表われている。

これ以上文句をいうなら、柏の木を引き
裂き、瘤だらけのその幹のなかにはさみ
こみ、冬が十二たび過ぎるまで吠えさせ
てやるぞ。 (1.2.294-296)

3 まとめ

もしプロスペローに、父の復讐をすべき息子がいたならば、ロマンス劇『テンペスト』はハムレットのような完全な悲劇になったかも知れません。しかしシェイクスピアは悲劇にしません。彼は人間悪に対して復讐ではなく赦しと和解を示したのです。ここにハムレットとプロスペローとの徹底的な違いがあり、悲劇からロマンス劇へと発展して行ったシェイクスピア自身の変貌もうかがえるのではないかな。

「参考文献」

福島昇「HamletとProsperoにおける復讐」
『英文学論叢』36(1988): 17-28.